

自由研究発表

ラエラエ島民の海洋観から見る「清浄さ」の複雑性

The Complexity of 'Purity' through the Marine Perspective of Lae-Lae Islanders

浦野 里彩 (慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士課程)

URANO Risa (The Graduate School of Media and Governance, Keio University)

海を神聖なものとみなす人々がいる。にもかかわらず、なぜかその海に毎日「ゴミ」を投げ入れる。さらには海に投げ入れなければならない「ゴミ」さえ存在する。一見すると矛盾に見えるこの現実には、どう共存し得るのか。本研究の調査地であるインドネシア共和国南スラウェシ州ラエラエ島に住まう人々は、伝統的価値観として海を神聖視する海洋観を有しているとされてきた (e.g. 佐久間徹, 「マカッサル族の地下 (水) 界についての伝承と観念」 『インドネシア研究論業』, 1981)。しかし、日常的に最も頻繁に見られる海との関わりは「海にゴミを投げ入れる」ことである。さらには「海に投げ入れなければならないゴミ」さえ存在する。この矛盾に見える事象を背景に、本研究では、神聖な海洋観を有しているラエラエ島に暮らす人々が日常生活におけるモノを介した海との相互的な関わり合いをどのように体現しているのか、特に「海に入れなければならないモノ」に着目して参与観察を行う。その結果を汚穢の観点から分析し現代の海洋観を見ることで、海の「清浄さ」の複数性の一端を明らかにすることが本研究の目的である。

加えて、昨今は SDGs が声高に叫ばれている。中でも Goal 14 では、海へのゴミの流出が生態系に悪影響を及ぼすことについて懸念しており、その解決のために、ゴミを多く排出する新興国・途上国に対する対策の必要性を強く表明している。しかし、ゴミを海に流出させる行為に関して、ゴミそれ自体の概念的な把握・理解や、海洋観が異なることがその排出に関連している可能性は、現在まで深く検討されてきていない。本研究は、ある小さな島で海を身近にして暮らす人々が、日常生活において、海とどのような相互的な関係を成り立たせているのかを明らかにすることで、彼らの「海」との存在を浮かび上がらせ、西洋的な見方では計り知れない「海」に関する価値観を示すことにも貢献し得る。